

進展するIT化社会における  
出版の将来  
—大学図書館からの視点—

土屋俊  
(千葉大学)

日本書籍出版協会知的財産権委員会  
2006年4月5日

# 目次

- この10年の(日本の)大学図書館の経験
  - さまざまな意味の電子図書館
  - さまざまな意味のインターネット
- その教訓
  - 「ライセンス」⇒著作権問題の「発展的解消」
  - 情報流通全体の構造を知ることの重要性
- 「電子化」が趨勢ならば今なにをすべきか
  - 学術情報流通の電子化の課題
  - 出版一般への含意

# 大学図書館の実力と特徴

- 公共図書館の総資料費: 354億円

内図書: 277億円

(日本図書館協会(JLA), 2003)

- 大学図書館の総資料費: 771億円

図書: 324億円

(内国内刊行: 197億円)

雑誌: 357億円

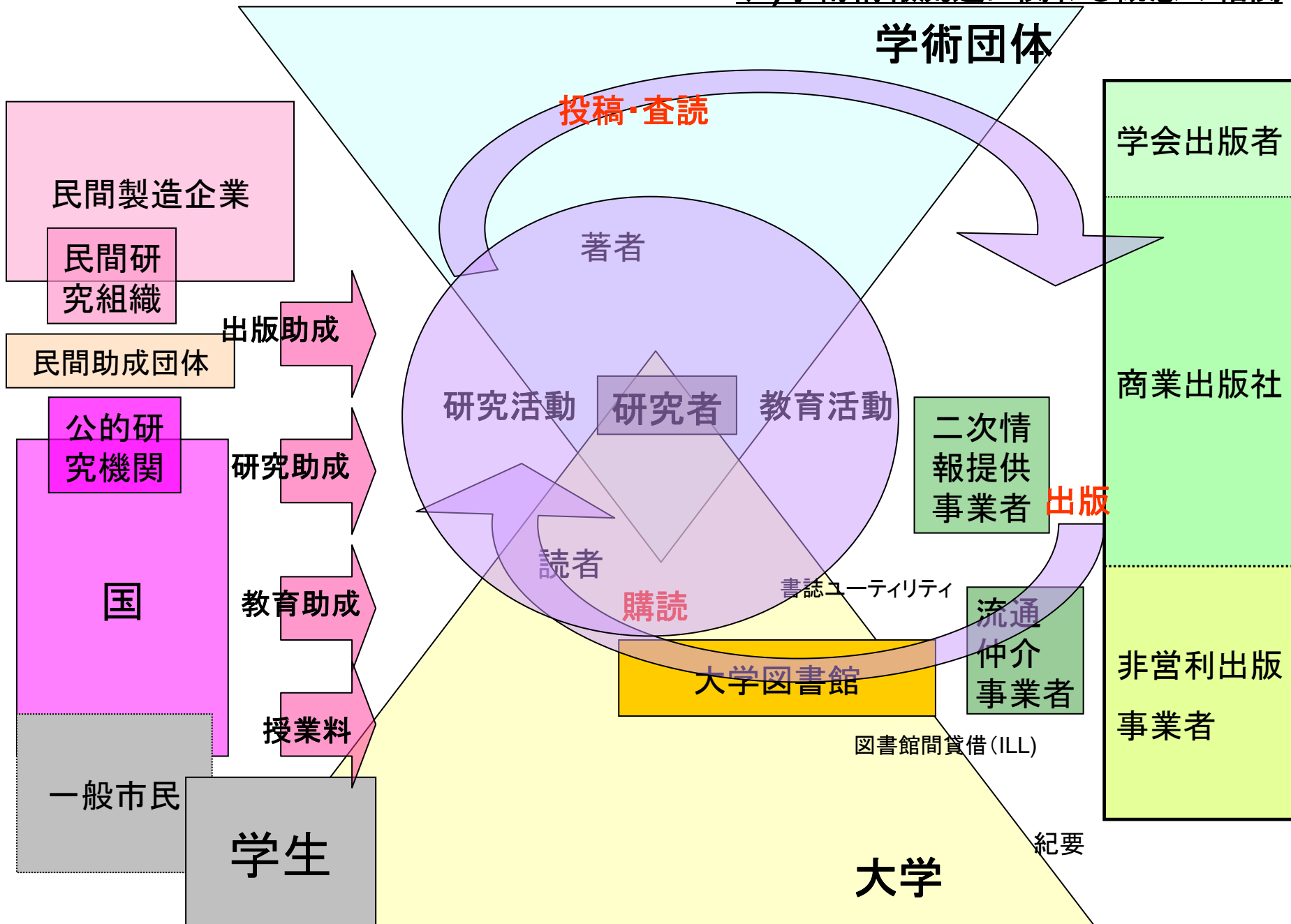
(内外国雑誌: 296億円)

(文部科学省「大学図書館実態調査」, 2003)

# 日本の大学の電子図書館

- 1980年代以降
  - 図書館「機械化」、NACSIS(総合目録)、ILL、図書館パッケージシステム
- 1990年代後半(日本版シリアルズ・クライシス期)
  - (貴重)資料デジタル化、「ペーパーレス」、インターネット無視
  - CD-ROMサーバ、OPAC
- 21世紀
  - 「電子ジャーナル」化
  - “Google”化

# (1) 学術情報流通に関わる概念の相関



学術団体

投稿・査読

著者

研究活動

研究者

教育活動

二次情報提供事業者

出版

読者

購読

書誌ユーティリティ

流通仲介事業者

大学図書館

図書館間貸借 (ILL)

学会出版者

商業出版社

非営利出版事業者

民間製造企業

民間研究組織

民間助成団体

公的研究機関

国

一般市民

出版助成

研究助成

教育助成

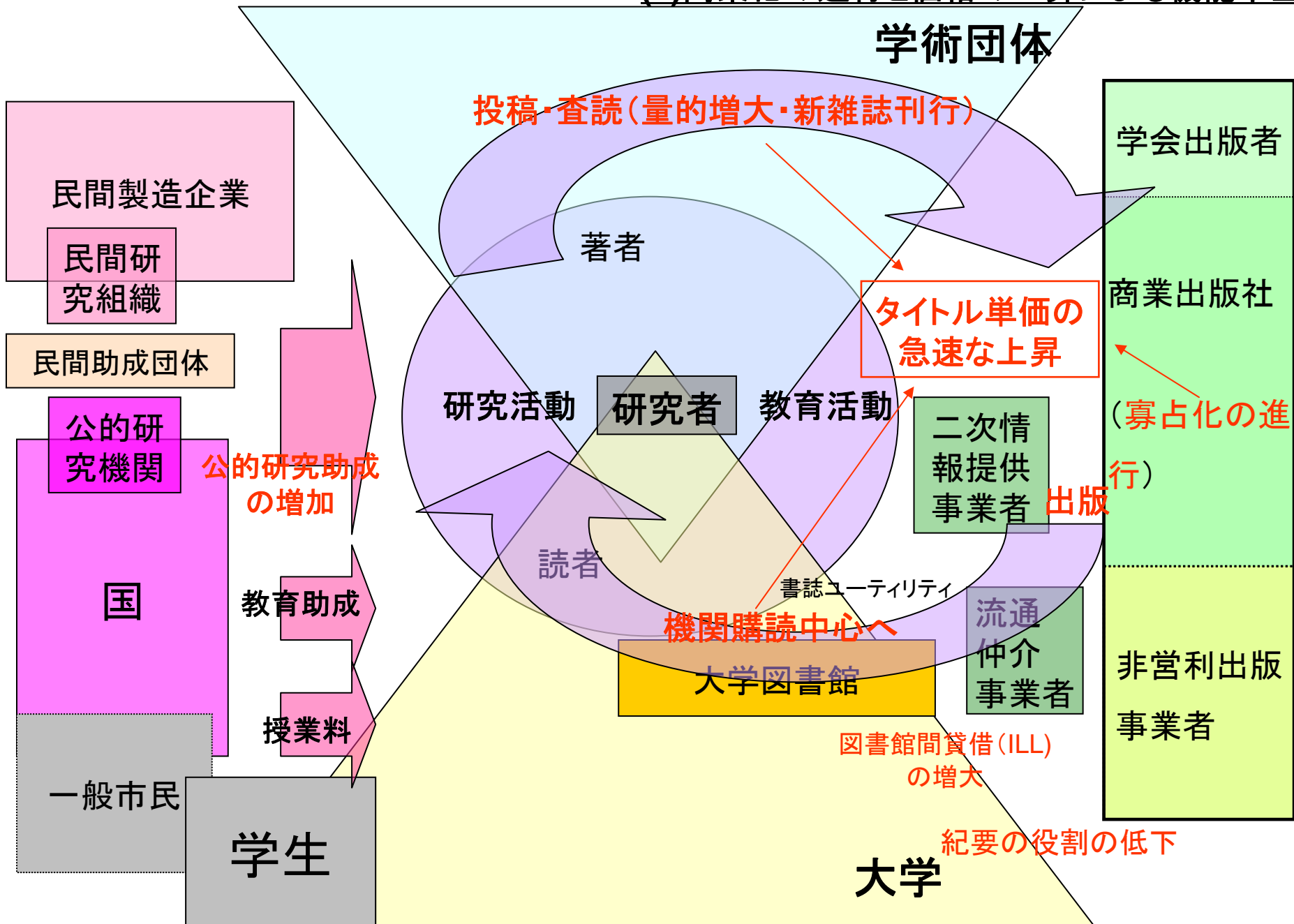
授業料

学生

大学

紀要

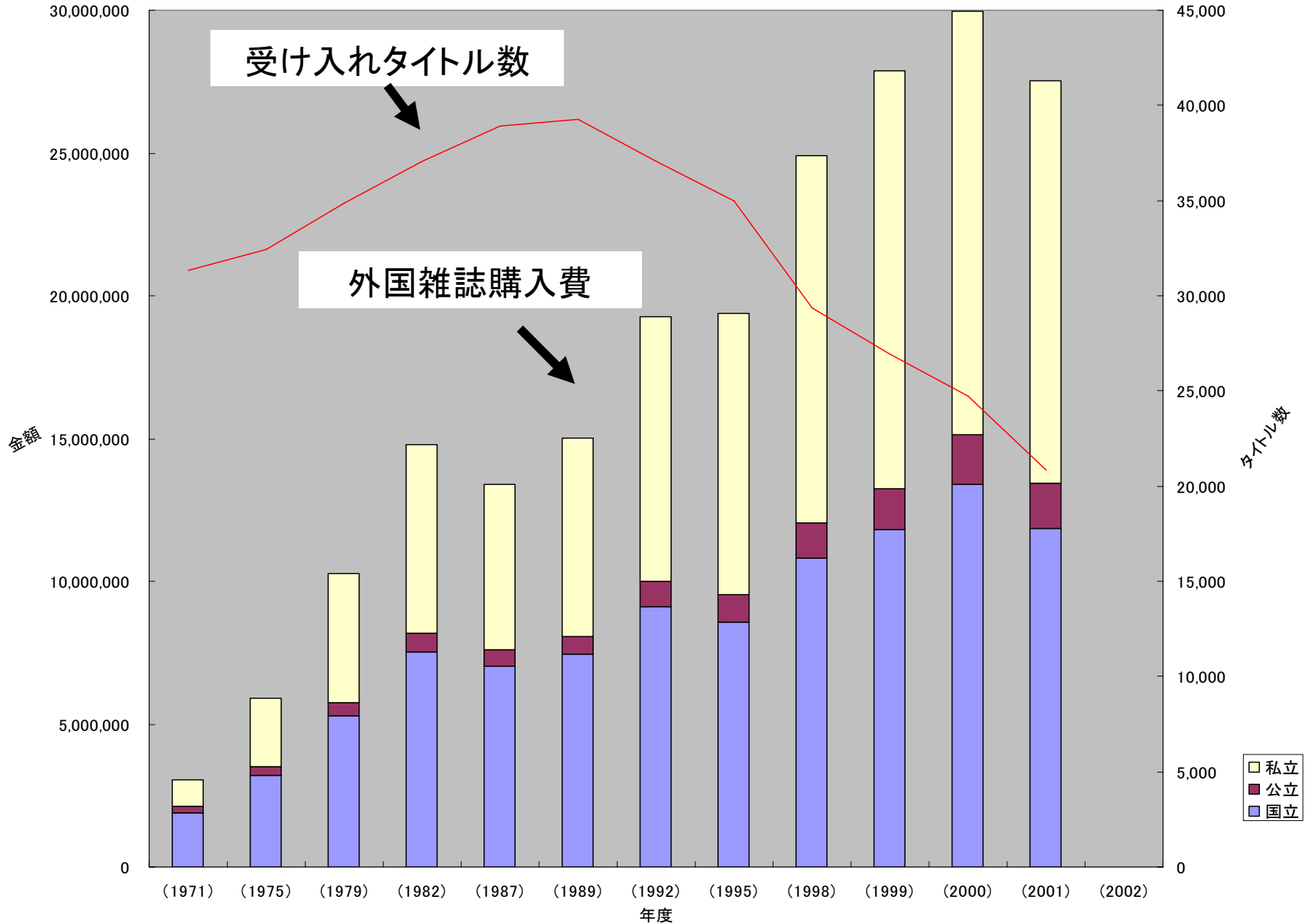
### (3)商業化の進行と価格の上昇による機能不全



単位:千円

# 日本国内図書館の外国雑誌購入費および受入れタイトル数

但し1982年度までは和雑誌も含む



# 図書館にとってのインターネット

- 最初は関係なかった
- OPACの登場とインターネットによる変質
  - どこに何があるかが訪問しなくてもわかる。しかし、それは目録のもともとの意味
  - CD-ROMサーバ提供は頒布方法の間接化？
- 図書館に対する脅威としてのインターネット
  - 資料の所在を知るのに図書館に行く必要はない
  - 資料そのものを入手するのに図書館に行く必要はない
    - 新しいA&Iの方法
    - なんでも電子化

# 日本の大学の電子図書館

- 1980年代以降
  - 既存出版構造への依存
- 1990年代後半(日本版シリアルズ・クライシス期)
  - 電子メディアの可能性を模索
- 21世紀
  - 電子メディアが基盤となる時期
- この問題への知的資源
  - 情報科学・情報工学: 本を読まない人々
  - 図書館情報学: 出版を第二の自然と考える人々

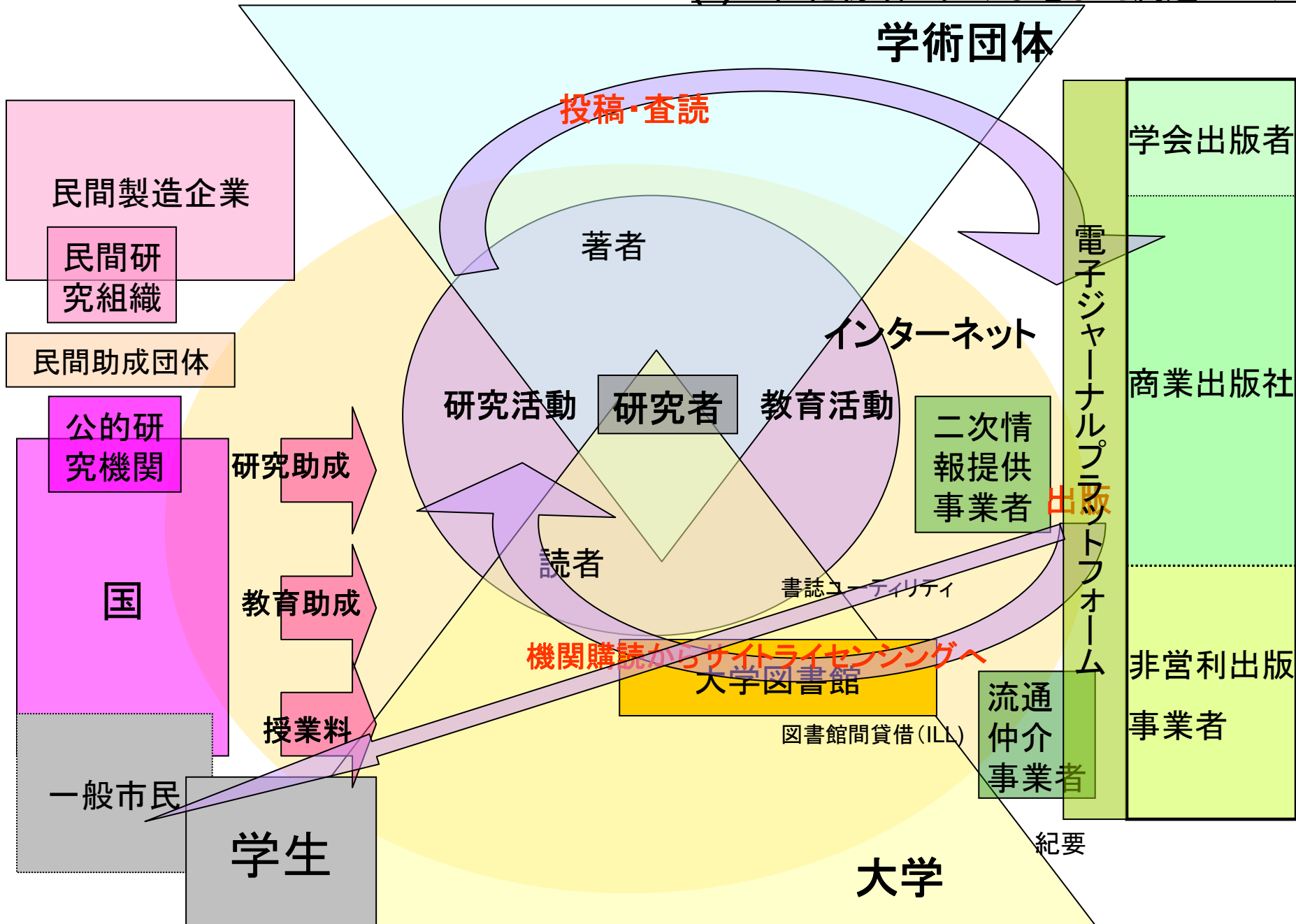
# 電子ジャーナルの登場

- それまでの学術雑誌
  - 投稿 ⇒ 査読 ⇒ 編集 ⇒ 製作 ⇒ 頒布
  - 製作コスト負担の不明瞭
  - 流通における中間的存在(取次ぎ、A&I、ユーティリティ等)の重要性
  - 機関購読への移行⇒「シリアルズ・クライシス」
- 電子ジャーナル
  - 出版者サーバからの直接提供
  - 同時多数、プリントアウトし放題
  - インフラコストの極小化
  - 中間的存在が不要となる

# 電子ジャーナル化の教訓

- ライセンシングの重要性
  - 所有から許諾へ ⇒ 著作権問題の解消または、その全面化
  - 「もの」の移動から情報そのものの伝達へ
- サイトライセンスの重要性
  - 機関の設置目的にかかわる
  - 図書館の位置づけの再認識
- スケールの重要性 ⇒ コンソーシアム
- 利用実態の把握が可能となる
- 中間的存在の見直しの必要性
  - ← 直接交渉の常態化

(4)21世紀初頭における電子的流通のモデル



# “Google”の登場

- データベースから全文検索エンジンへ発想転換
  - それまでの書籍がらみはすべてデータベース: データベースでは、注目すべき性質が限定され、かつ、キーワードが限定されている  
⇒ ゴミが少ない
  - 全文検索エンジンでは、なんでも引っ掛けられる。しかし、  
⇒ ゴミだらけ ⇒ 表示順序による解決 ⇒ 結構使える(セマンティック・ウェブもあるが)
- ワンクリックでコンテンツへ
  - しかし、実現は困難 ⇒ クオリティ・コンテンツ探し(Google Library/Google Print etc) ⇒ この心性の誕生は無視できない(素直な情報・知識探索本能?)
- ユーザ支払いに依存しないビジネスモデル
  - 癒着かもしれないが、民放だってあるし

# “Google”化の教訓

- 中間的存在(A&I、二次情報DB、書誌、アグリゲータ)の見直し(EJ中抜きと別の観点から)
  - CrossRef、OpenURLなどの出現
- OPACはもういない
  - 書誌では不十分。実物をすぐにみたい
- ホームページなど誰も訪れない(少なくとも文献を求めては) ⇒ 必要な情報に直接
- 蓄積可能な膨大な個人嗜好情報
  - 「ほかにもこれをお求めになる」情報

# この10年で大学図書館は、学んだ

- 学術情報を電子的に流通させることはよいことである
  - はやい
  - 安い(すくなくともコストパフォーマンスはよい。情報単価としても労力としても)
  - 便利
- もう学術情報は電子的流通しかない
  - ⇒ それに抵抗するのではなく、そのなかでどうするかを考えよ！
    - 図書館をどう変えるのか
    - 大学をどう変えるのか (ここからは大学図書館論だが)

# さらに大きな流れを見る必要

- 世界規模における学術情報流通
  - いわゆるSTM(Science, Technology and Medicine)情報の動き
  - すべての資料の電子的アクセス可能化
- (日本の)研究・教育のなかでの学術情報流通
  - 研究費そのものは増えている⇒成果は増える
  - 基盤経費はふえていない
  - e-Learningの可能性と意義
    - 生涯学習？

# STM出版は成長している

- 英語によるグローバルな市場になっている。
  - 100億米ドル規模の市場
  - 1%ないし7%の成長
  - 寡占(TOP20で総売り上げの83%)
- 日本からの参入の余地はほとんどない。しかし、日本が10%以上の原材料を提供している(資源立国できる珍しい分野?)

# R&D自体が増大

- アメリカ:最大は薬品、テレコム、自動車

2001 \$273B

2002 \$275B

2003 \$282B

2004 \$289B

# 電子媒体への移行

- 電子:印刷 = 6:4 ⇒ 7:3
- 医療分野では印刷の比率がやや高い
- 主要出版者が95%のバックファイルを整備
- 電子ブックの時代が到来(図書館モデルから出版者自身の関与へ)
- トップ5: Elsevier, WK, Springer, Thomson, MediMedia (さらに、Wiley, T&F, Veritas, ACS, NPG, Blackwell, AMS, HIS, McGrawHill, Dialog, Seitel, IEEE, Thieme, BMJ, Slack

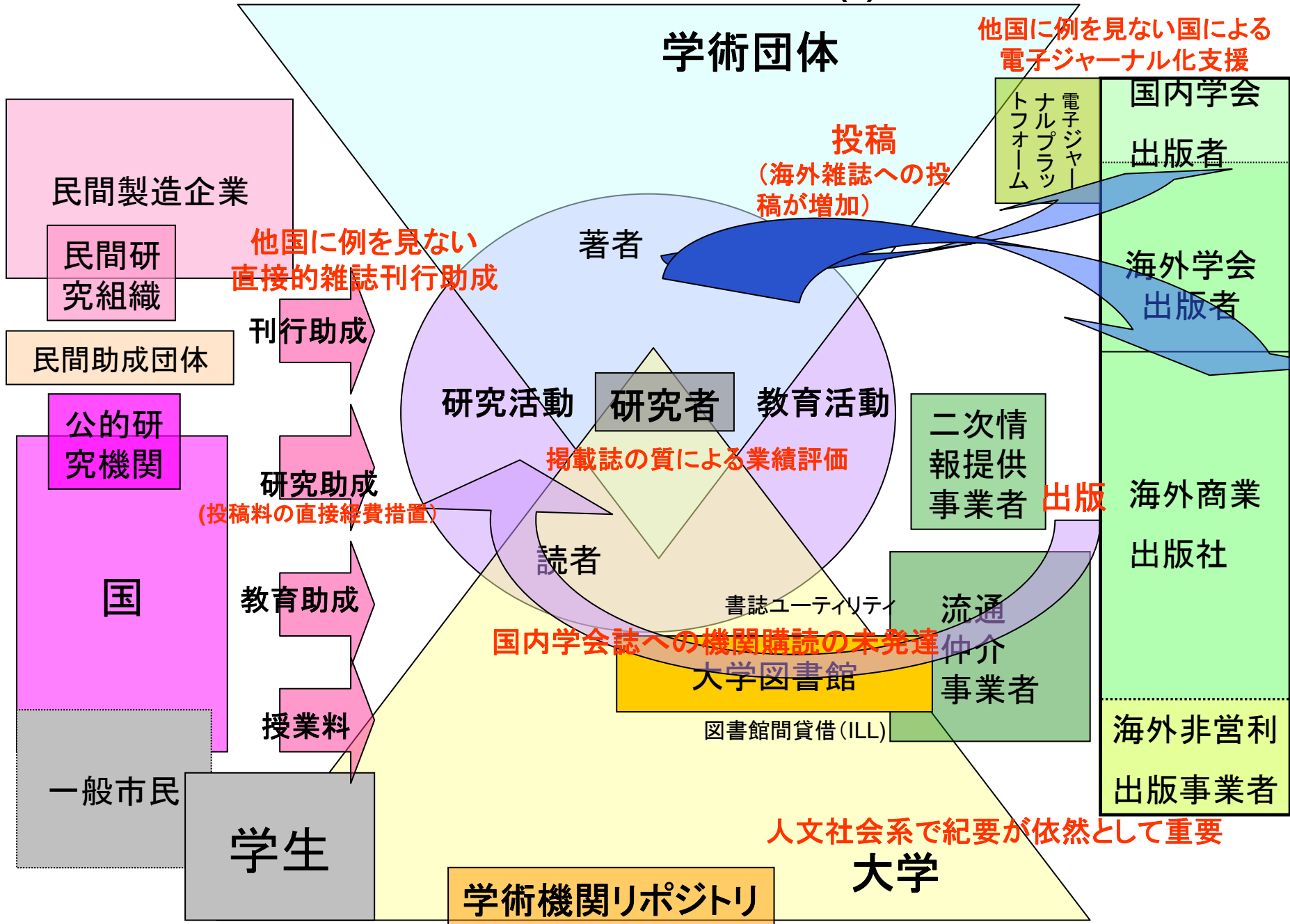
# Open Accessへの対応

- 科学研究が税金によるという事実
  - 納税者への責任
  - 科学の普遍性
  - (ただし、知的財産の問題)
- Open Access ⇒ Public Access(NIH)
- Open Access ⇒ Self-Archiving(RCUK)
- Open Access ⇒ Open Access Journal
  - Springer, Blackwell, OUP, BMJ, ...

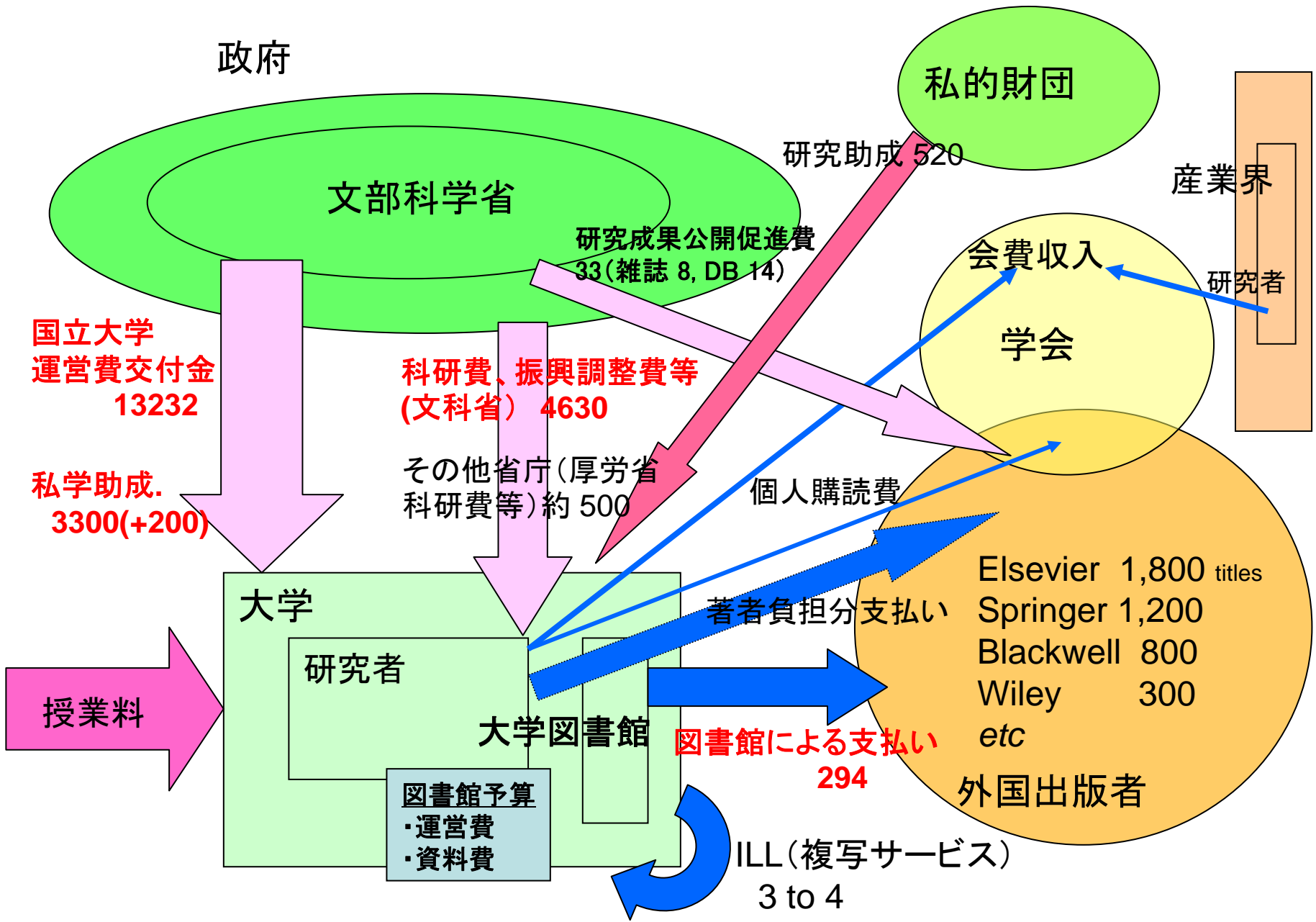
# その中で日本は？

- 学会中心の学術雑誌刊行
  - すくなくとも出版産業は関心をもたなかった
- 紀要、同人誌中心
- 大学との関係では
  - 教科書
  - 参考書
- そして、図書館による複写の問題
- しかし、これらには図書館(大学)は支払っていない
- 健全な経済的関係の不在

# (6)わが国における学術情報流通

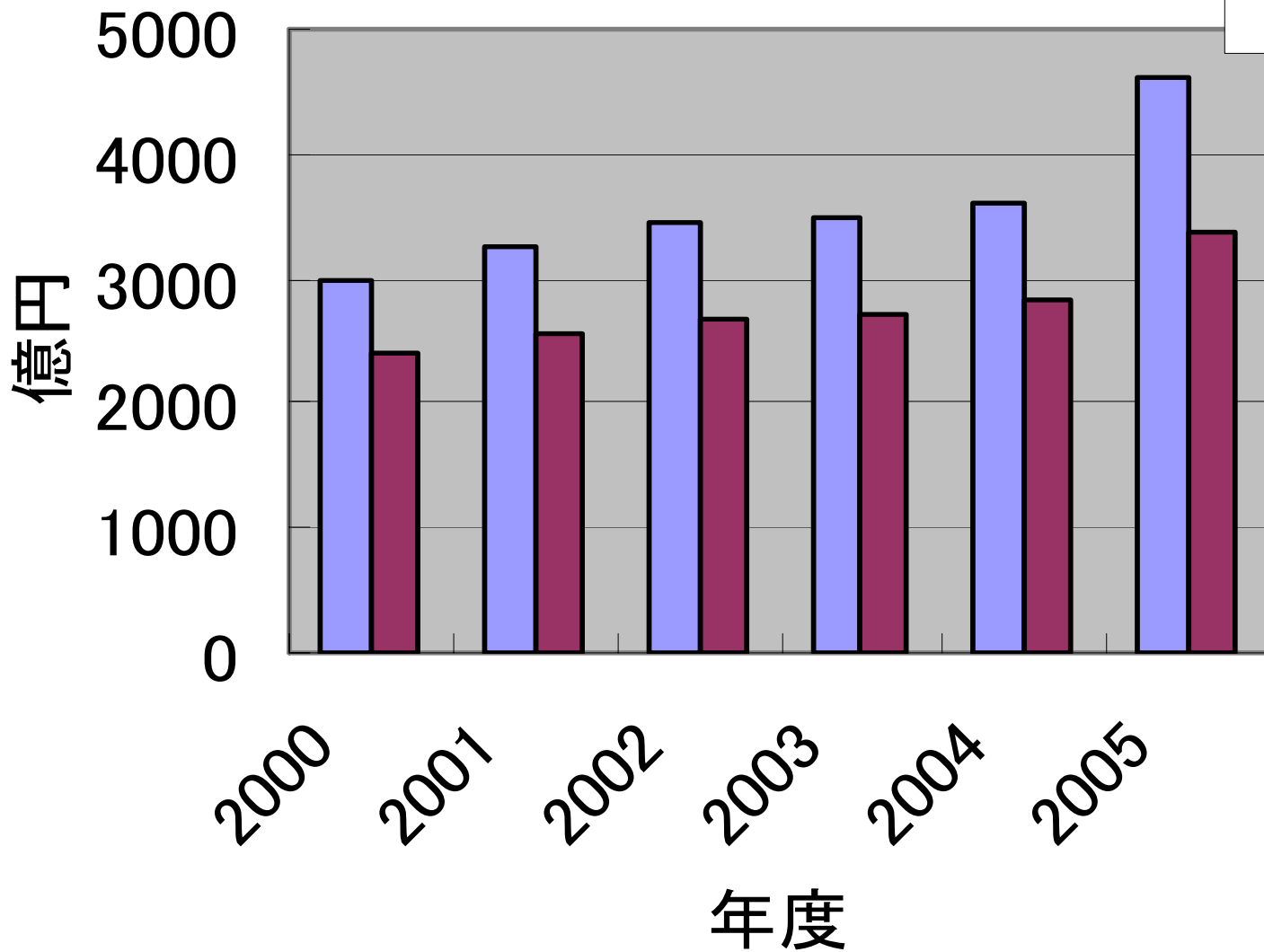


# 日本における研究助成の流れ(1億円 = US\$1M、2004~5年)



# 競争的資金の伸び

- 国全体
- 文部科学省  
関係



# これからの出版への期待

- 現状
  - 外国資料(英語)は電子で
  - 日本語資料は紙で
- 大学の教育の変質
  - これまでの(国立)大学: 研究第一、教育無視
  - これからの大学: 教育重視、研究成果の直接還元
- そのなかでの資料事情はどうなるか
  - いままでのような教科書は不要。しかし、厚いと高くなる。電子化の効用は？

# 図書館は電子化へ動いている

- 外国雑誌は支出の大半を占めるので、当然それに引っ張られる
- 外国図書もそちらに向きつつある
- 人がすくなるなるので、労働集約性の高い作業は回避へ ⇒ とくにILLはやりたくない
- 電子的製品のほうがサービスに幅が出る
- それにもかかわらず日本の資料が印刷物としてしか入手できない状況を何とかしてほしい(電子ブックはだめ)